

2018年

猛暑号

第 196 号

飛鳥

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail:info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



猛暑！尋常でない暑さ、マスコミは「命に関わる暑さです。水分を摂り、ためらわずに冷房をつけて」と、連日のように報道しています。

そんな中、豪雨被害に遭われた方達を思うと、いつも通りの日常を送れることがどんなに幸せなことかと改めて思い知ります。

でも、やっぱり暑い！

お寿司の本をつくるぞね～	松崎敦子	2
おのころじま奮染記 14	田島征彦	4
いろいろかいり 三	安藝真一	6
キルギスタンからコンニチハ ⑫	氏原名美	7
新聞余話⑦	大澤重人	8
出版物紹介		9
わが家の太郎 ⑬	永野雅子	10

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

お寿司の本をつくるぞね～

松崎 敦子



この秋、土佐学協会の事業として出版される私の本のことですが——「おまさんが今までに書いていたり、しゃべったりしたことを纏めて本にしちやるき」と云われたら、誰じゃち「えーっ！ まさか？」と思いますぞね。けれど、それが今度出る「土佐寿司の本」ながです。あたしやア、もう、おそれ入っちゃいます。

二本杖で、ようよう歩いて、動きゆうのは口と手だけの私が土佐学協会に入ったのは二〇〇七年の創立の時。「土佐をゆたかにする」合言葉のもと「生活に目を向けて、勉強を始め、こむつかしゅうせんと、全体を見渡して、指導者を育てる」老若男女の集まりです。隅っこで、書けと云われたら書き、話せと云われたら喋っていました。その私が九〇歳を過ぎると「こりやア手伝うちゃらんと」と、若い方たちが……で、これまでの会報への寄稿やら、講演を活字で並べるだけでなく、具体像を撮影しに来てくれたり、かかわりのある記録や行事を並べたりして、楽しく、内容豊かな冊子にと。これぞ土佐学的事業！ って感じに。そのタイトルが「土佐寿司の本」

自分史をふりかえると、井の中の蛙の私。これまでに目のウロコを落

して下さった方がいっぱい。

昭和六一年に共著で出した「聞き書 高知の食事」は、昭和初期の高知の食料生産とその食べ方があるがままに再現して、経済成長の成果として変貌した食卓と、それ以前の自然豊かな食卓とのどちらが「人間性豊かな食卓」かを問うものでした。その出版に、一文を寄せて下さった人気マンガ家でテレビではクイズ王だった、はらたいら氏が「土佐のおきやくはお酢ぜめ」と書かれていたので、イミを問うと「NHKの家計調査で、食酢の購入額日本一をズツト続けているのは高知県。高知はア酢の好きな県はないぞね」と。「まっこと。酢みかんもいっぱいやし！」と大声の私でした。だからおかずに酢ものが多いし、〃おきやく〃といえは寿司ですよ。それから、平成二〇年すぎで縁が繋がった本間千枝子さんは、「アメリカの食卓」で、サントリー学芸賞を受けられ、日本各地の食にも精通した方ですが「西は高知、東は山形」と云われるので「それ、何のこと？」って聞いたら「食文化のすばらしい県です」と。ヘエーッ！と、改めてよく考えてみると——。

高知の自然は山・川・平野・海がすべてあり、四季の食材が豊かな風



土だと改めて実感。その良さを生かさぬまま過す県民たちに警鐘を鳴らすべき！」と。司馬遼太郎は「土佐人は日本人の原型」と書いていますが、食の上でも云えるのでは。だって、手を加えずとも美味な食材にあふれているものネ。と、こんな風に気づかせて頂けるのは嬉しいことです。

で、お寿司のことですが、SNSは今では地球的規模の料理。SNSの情報で、ニューヨークから土佐田舎寿司のニュースが届いたのです。ニューヨーク工科大の女子学生に、市民の方が「貴女は日本の高知の方ね」と声が掛り、SNSを見たらナント「日曜市の田舎寿司」というのは、一昨年の一二月四日(日)に東京の男性が、日曜市の田舎寿司を丁寧撮影し、食べて、感想を書いて、流していたのです。で、彼女は在高知の母上に知らせて来て、それが私に伝わり、私が土佐学総会で紹介したところ、成田十次郎会長から「この情報は知事に伝えるべき」と。竹村昭彦理事長らと県に伝え、やがて県は地域農業推進課の企画で「土佐寿司を広める会」をたち上げたという次第。

また一方で、東京の「酢飯屋」という若いお寿司屋さんが、一昨年出

版された「季節のおうち寿司」のこと。ご自分のお心入れの寿司に加えて、各地の郷土寿司(鹿児島島の酒ずし、小豆島の生ずし、京丹後のばらずし、佐渡のもち米ずし、高知の田舎ずしとキビナゴのおからずし)を取材されています。ここで、「郷土寿司大国高知県を訪ねる」との標題にはビックリ! 「高知には数多くの郷土寿司があります。ひとつの県でこんなに種類があり、数も多いのは珍しい」と紹介されています。そう。お酢好きで、昔はお米がご馳走だったから「なんでも寿司にしちゅう」高知県をプロも認めたってわけ。

で、このたびの本には、かつて私の研究課題だった調理の科学特性を追いつつ作り上げていった鯖ずしを紹介させて頂く頁もとりました。

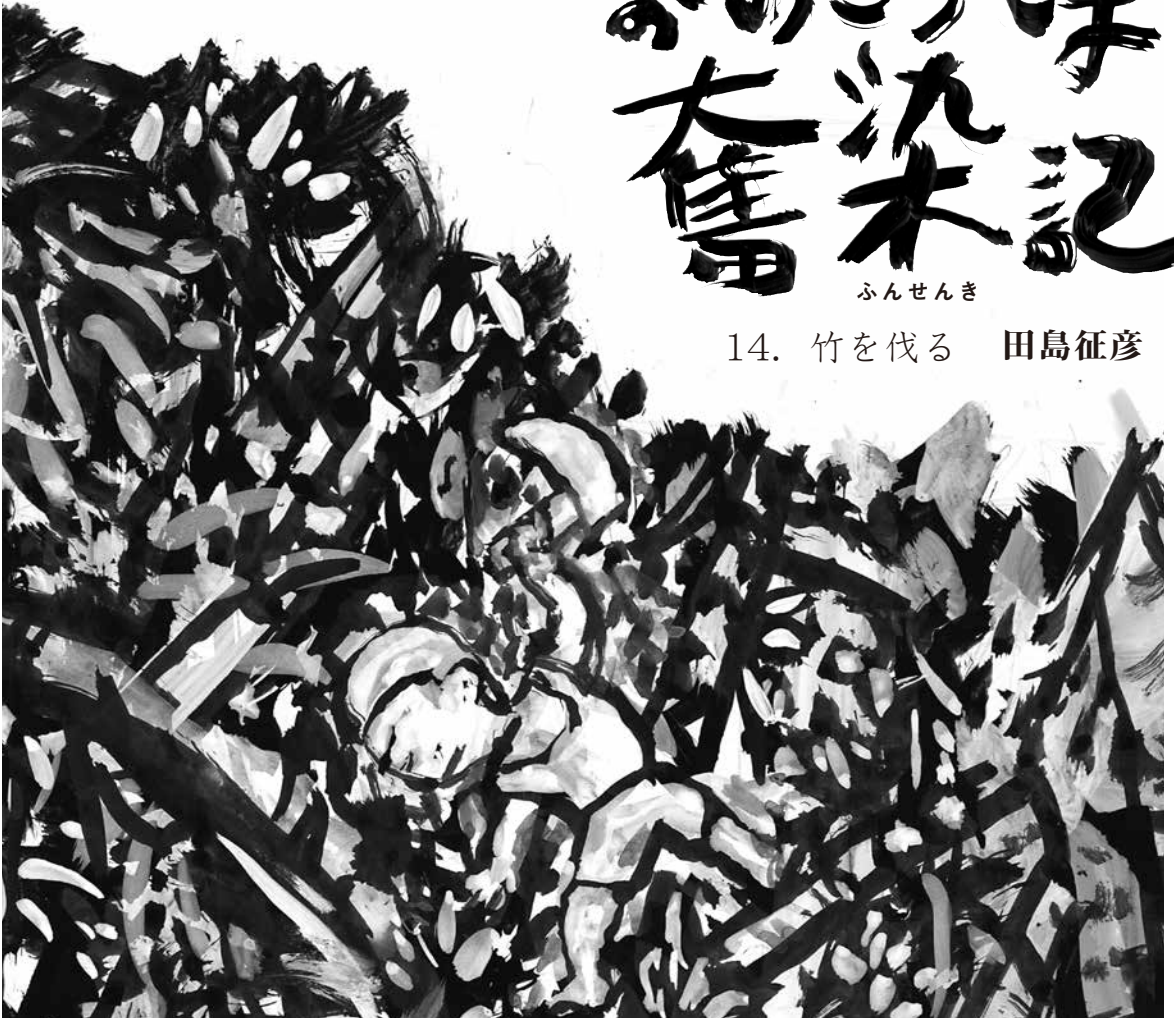
地産食材の調理特性と共に食の賞味かたを探し求めてきた私。より学際性があり、大衆性もある土佐学の世界において、調べは高く、それでいて優しい広場に立っている感じです。「同志よ、来たれ!」

まつぎさき・あつこ／高知市

おのころじま 太田木記

ふんせんき

14. 竹を伐る 田島征彦



田植え前になると、淡路島^{わのころじま}でも、道端や畑の中にまで、孟宗竹や破竹の筍が、ところ構わず頭を出し始める。生えたばかりなら、足で蹴っただけで、ポキッと折れてしまうのだけど、少し油断すると、舗装されていない小道は竹藪に呑みこまれたようになるし、畑の玉葱や大根が、立派な若竹にとり囲まれたりしている。だから孟宗竹や破竹の筍はアクがなくて美味しいと言われた、食べるどころか、竹にならない内に、見つけたらバシバシ倒してしまわねばならない。

そんな季節になると、思い出すことがある。

ちよつと心が痛む苦い想い出なのだが、もう70年も昔のことだ。ぼくは小学3年生か4年生で、高知県吾川郡芳原村字磯戸(現・高知市春野町芳原)に住んでいた。一家は小さな山の下古い農家を借りて住んでいた。山の上には墓場と少し畑があるが、ほとんどは竹藪だった。

ぼくと征三は、朝早く2人で山羊の餌を穫るのが役目だったので、毎朝、山へ上っていた。竹藪には真竹の筍が大きく育って、皮を落し始めた若い竹が、2、30本も伸びていた。二人は道端に出てきた若い竹を邪魔になるため大人たちが切り倒しているのを知っていた。既に筍としては、食べられない若い竹は無用の邪魔物だと思った。2人とも、鎌を握りしめて、立派な若竹に襲いかかった。小さな子供の腕でも、大人の腕ほどある柔かい竹は、面白いほど、バタバタと切り倒された。二人は、大人たちに代って、仕事をした様な気持で、意気揚々と山を下りた。



その日、学校から帰った二人は愕然とした。集落中が、竹藪を荒された大きな被害に怒りかえっていたのだ!! 筍としては食用にならなくても、2年も経てば竹材として、立派な商品となり、農家の収入になるのだった。

二人が、今朝の大活躍を誰にも話していなかったのも、疑いの目で見られていたとしても、田島のフタゴのしわざだという確実な証拠を掴んではなかった。隣家のエイちゃんの庭で遊んでいると、一人の老婆が子供たちを集めて

「みんな、ここへ来てみいや! ワシが手の匂を嗅ぐきねえ、誰が竹藪でイタズラしたか、すんぐに分るき!」

老婆は順に、皆の手に鼻を近づけては、一人ひとりの顔をみつめた。ぼくら二人の番が来たが、筍の匂がするとは言われなかった。

この事件は何故か、それ以上の追及はされないまま終わった。もちろん、ぼくらの心の中にはオリのように、いつまでも残ったままだ。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。最新作『のら大ボん』が人気。

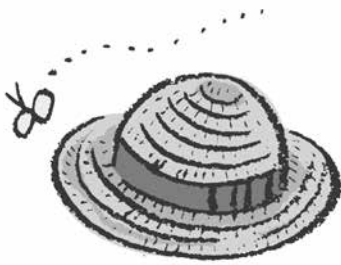
※『おのころじま』は淡路島の古代のよび名

い ろ ろ か い ろ

その二十三

遠い夏

安藝眞一



夏、私にとつての夏の思い出は水芭蕉ではなく、敗戦の夏の日。

七月四日の深夜、米軍B29の大空襲で高知市が全滅して、家族がそれぞれの身体一つで疎開したのが本山の奥の汗見川のほとりの家。

小学四年生だった。夏休みの中ごろに重大なラジオ放送があるという日、緊張して聴いた玉音放送天皇陛下の声は妙に高く、糸を引くように繰り返して、言葉の意味も判らないまゝに済んだ。「戦争が終った」と祖母が云った。

音がなくなり何もかもが静かに停まり、風もなく、汗見川の水音だけが、聴こえてくる。

腹が減った。とうもろこしが、食べたかった。祖母は私の手を引いて立ち上がり「キビを貰いに行こ」と云う。暑い道を歩きとおして、やっとキビ畑のある農家に出会う。出て来た農婦に訳を話すと「キビはうちで食べるきに、あんたらあに分けるわけにいかん」といい放つ。おどろいた私の横で、祖母は「ほんならキビの外の皮はいらんろうき、分けてくれんかね」と問うに農婦は「外の皮は、便所の落とし紙の替りに使うきに、い

かん!」と云う。絶句した祖母の手を握ったまゝ、私は、あんな皮で尻を拭いたら、いとうないろうかと思った。ひるまず祖母は「ほんならキビの先のヒゲ、毛はいらんろう?」と訊く。農婦は「先の毛は要らん。要らんが、おまさん毛をもううてどーするが」の問いに祖母は「毛をくれたら、干して、キセルにつめて煙草の替りにするが」——話はまとまって、キビなし皮なし、毛だけをあつめて元の道を歩いて帰った。

食べるものが毎日なかった。夏休みなのか、戦争が終ったので休みなのか、何もかもが動きをやめてただ退屈だった。腹が減った。

毎日が上天気だった。暑い日が続いたが、山のあい間を吹く風と川の流れの音が空に抜けて、涼しい。学校に行つて見る。誰もいない運動場が陽に灼けて白くひろがっている。校舎が黒く静まって、誰もいない。音もしない。

校門の近くの銀杏の樹の元が、なんとか日蔭になっているのを見つけて、土の上に寝そべって横になった。見上げる空が高い。小さな白い雲が浮かんでいたが、それ

も見えるほどもなく空の高さに吸い上げられて消えていく。見上げれば見る程に空の青は澄み切つて、深く青く、涯もなく天空に吸い込まれていく。「天、高く……」の歌はこのことかと思ひ知る程に青空が生きものの様に空の奥へ奥へと伸びて吸い取られていく。胸の中へと、その深い青が降り積もつて来て腹にもまわり、ひもじいことも、もう、どうでも良くなつて、ただ／＼空の青さを呼吸していた。雲は飛んだ。

戦争が終つたら、夏休みのあとの二期は、どうなるんだろうと考えたが、もう、どうでもよかつた。高知へは、いつ帰れるようになるだろうか、とも考えた。家は焼かれて灰になっているし、帰る先はない筈だ。ともかく夏休みがもう終る。秋が来る。何とかなるのだろうか。

日射しが強くなった。見上げる空は、また一段と高くなった。空の青さが深く澄みわたつて静かだった。

あき・しんいち／高知市



大学フェンス裏話

氏 原 名 美

うじはら・なみ

高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

大学の敷地が高いフェンスで囲まれた。かなりの出費だったと思うが、役所や国立施設の整備計画の一つでテロ対策も兼ねているらしい。黒地に金色の飾り模様のフェンスには、四方に観音開きの扉が設けられているのだが、どの扉にも頑丈な南京錠がかけられて通行できるのは東側の歩道に面し

た中央ゲート一箇所だけとなった。去年まで周りには垣根もほとんどなくて、自由に出入りできた。放課後、大学構内は近所の子供たちの格好の遊び場になったし、ベビーカーを押して車の通らない広々とした構内を散歩する人たちもいた。夏休みには正面広場の噴水で小学低学年の男の子たちが水遊びに興じるのが常だった。しかし、今年の夏、子供たちの姿はない。正面ゲートから入ると警備員ブースだ。ブース横の通路は改札口のようになっていて回転式のバーがある。人がやってくる度に警備員が手動で開閉する仕組みになっている。ところが六月に入るとブースは空っぽ、ロックも外されて、「だれでも勝手にどうぞ」状態となった。四十度を越える夏、エアコンもないから律儀に詰めていたらそれこそ大変、必要な時に待機している本館から走ってくればいいのだ。しかし、テロリストが襲つてきても間に合うまい。

* * *

れ落ちどこもかしこも錆びた鉄骨がむき出しの危ない状態だった。「解体中ですか」と聞いたら、改修中だった。「資金詰まりで工事再開のめどが立たない」とのこと。数年後、突然工事が再開された。改修費用は教員給与から毎月一定の割合を天引きして用意した、と知らされたのは工事が終わった後。事前に教員に対して協力を求める話など一切なかった。大統領選の票集めで学長が「国立大学は現職大統領に投票しない教員を解雇すべきだ」と発言しても、誰も非難することはなかった。表立って文句を言う教員もいなかった。当時、学長は政府が任命権を持つていて、政府に頼らず「自分の大学」で資金を工面できるものが任命された。今は戦略が変わり、大学は外国からの支援獲得に精を出すようになった。今回のフェンスはその筋によれば中国の支援によるらしい。中国は言語を制する者は民意を制するとして中国語の中央アジア共通語化を進めている。うちの大学は孔子学院もあるし中国語専攻学生が国内最多だ。両者の利害が一致したというのだ。

「文化無償協力で日本国政府に一千万円規模の改修工事をしてもらいました。次は構内のセキュリティを充実しなければならぬのです。」と学長が日本をチラつかせながら中国の関係者に囁いた結果だとしても不思議ではない。平均給与の半額でしかない教員給与をピンハネしても高が知れているが、助成金の上前はかなりの額だ。

先月、日本国大使に特別講演をしてもらったときのこと。大使専用車が到着、件のフェンス北門大扉を開いて大使をお出迎え、まずは学長室にご案内、握手と外交辞令、和やかな歓談と続く。そして最後に学長が「フェンスもできたと、中国が中国風の庭を作ってくれたと言っている。日本庭園もあつたら最高ですよ」と、大使の方を見て笑った。

おわり

革靴を新調しました。先のことがった茶色の細い靴です。早速履いて家を出たところ、かかとが靴擦れし、歩くたびに痛みます。我慢しきれずコンビニへ。靴下を脱ぐと、かかとの皮がめくれ、出血しています。購入したばかりのガーゼ付きばんそうこうを貼りました。



勤務先の大津支局に新人の女性記者が春に赴任しました。パソコンやカメラの入った重いリュックを背負い、足腰軽く、細身で走り回ります。頼もしい限りです。我が社の新人記者は少し前から女性が多数派になっています。新人記者は昔も今も、事件や裁判、スポーツ担当から始めます。警察に電話することが多いようです。隣に座るのが私。おじさんの悪い癖で思わず口を出してしまいます。

「左利きでないのなら、受話器は左で取った方がいい」。右手でメモするのに都合がいいからです。事件事故の有無を県内全署に尋ねる警戒電話(通称・けいでん)では「広報、何かありませんか」と聞いています。「広報ではなく、事件事故がないか聞かないと!」。広報を聞いても、事件事故の有無

新聞余話 ⑦

大澤 重人

新人の頃



を聞いても、警察の受け答えは変わらないでしょう。捜査に支障のあるときや自らの不祥事は教えてくれないからです。とはいえ、新聞社は、広報機関ではなく、社会に知らせないといけないことは伝えるというスタンスでいてほしい。私の初任地は高松支局でした。

アピール下手なだけに、会社名や出身地など三つの頭文字が「M」だったことから、「3Mの大澤」と自分で名札を作り、警察署を回りました。ああ、恥ずかしい。警戒電話を掛けると、広報担当の副署長たちは讃岐弁で「なんちゃ(なんにも)ない」。ある日のこと。「なんちゃんない」と言いながら、実は

後で事件があったことがわかりました。文句を言うと、当の副署長は「だから『なんちゃんないげな』と『げな(方言で「らしい」の意)』をつけたやろ」。一本取られました。

新人時代を思い返せば、赤面することがたくさんあります。フィルムを入れずに撮影(デジカメ時代でないので致命傷です)したり、高校野球の記事で「坊主頭となる罰がある」などと書いて、お寺の関係者から「坊主頭は罰なのか」とお叱りを受けたたり。地検で名刺交換をして支局に戻ると、もらったはずの名刺がありません。地検の偉い人の名刺を、別の偉い人に間違えて渡していたようです。

例の副署長とはこんなこともありました。「なんちゃんない」に対して「きようはニュースがなくて困っているんですよ」とこぼしたら、「香川には100万人(当時)もおおるのに、ニュースがないはずがない」。ぐうの音も出ませんでした。ニュースは提供されるものではなく、自分で探すものだと教えられたのです。



冒頭の革靴。今度はあらかじめばんそうこうをかかるとに貼り、家を出ました。どうしたことか、あ



問題の革靴

れほど締め付けられた靴がなじんでいます。拍子抜けするほどです。そのとき思い浮かべたのは、新しい職場や学校で歩み始めた人たちのことです。そう、最初はつらくても、もう少し歩けばいいのではないかと。

おおざわ・しげと
毎日新聞大津支局兼地方部エリア編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。著書に『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡』第26回高知出版学術賞特別賞受賞 など。

『真希とひめゆり』

町田 樹生

204×210上製本 44頁
定価：本体1,200円(税別)

いの町出身の油絵作家・町田樹生さんの四作目となる絵本が完成しました。今回のテーマは「戦争」。山の学校に通う真紀たち六年生三人が平和学習旅行で沖縄へ。

『広瀬金蔵 絵金の真実』

『土佐にあだたぬ男』は龍馬だけではなかった

村上 純一

A5判上製本 152頁
定価：本体1,500円(税別)

元高知学芸高等学校の教諭で現在明德義塾高等学校竜キャンパスの講師である村上純一さんが長年調べていた広瀬金蔵「絵金」について纏めた一冊。

「絵金とは何者か。」謎につつまれていた絵金について文献・資料などから読み解いていく。

句集『空企(くうき)』

田口 朝光

A6判並製本 320頁
定価 1200円+税

二〇一〇年七月、高知新聞の「文芸欄」(「柳壇」)に投稿。その一つを選者の西川富恵さんに拾っていただく。その後も選評句だけではなく、採っていただいた。

第Ⅰ部 西川富恵氏高知新聞選評句
第Ⅱ部 西川富恵氏選句
第Ⅲ部 自選句。

ある日のシャッフルランチ報告 by 谷本

今月のシャッフルランチ1組目はカレー班の常務・川田部長・中村さん・谷本で「カレーハウス CoCo 壱番屋」さんに行きました。

私もあまり行く機会がないので前から行ってみたかったお店です。



行って分かったことですがドライブスルーもあるんですね。

メニューがトッピング例なども載っていてどれにしようかみなさん慌ててしまいました。

カレーと一緒に常務の好きな計らいでサラダを注文しました。



(写真はトッピングを載せる前)



中村さんはヒレカツカレーに半熟たまごをトッピング。

常務と川田部長は野菜カレーになすをトッピング。サラダとカレーと一緒に注文すると結構ボリューム

がある上に野菜カレーの中のじゃがいもでお腹が満たされて川田部長と常務が苦勞していました。

私は海の幸カレー、トッピングなしです。



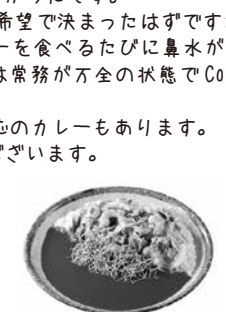
たしか CoCo 壱は常務の希望で決まったはずですがその常務が花粉症でカレーを食べるたびに鼻水が出て大変そうでした！今度は常務が万全の状態で CoCo 壱にリベンジしましょう。

CoCo 壱はアレルギー対応のカレーもあります。川田部長運転ありがとうございます。

誰も食べませんでした。が地域限定カレーです。血うどんが豪快にトッピングされてますね。



シーフードカレーが好きなので魚介の出汁が出たカレーを期待して注文したのですが普通のカレーに海の幸が入っていただけでした。ちょっと私の期待とは違いましたが家で食べるカレーよりスパイスが効いていて美味しかったです。



印刷屋さんの 「すったもんだ」

代表取締役社長 永野正将



毎日本当に暑い日が続きます。皆さん体調など崩されていないでしょうか？私自身、お酒が大好きで、以前は毎日嗜んでいたのですが、日頃から飲む機会も多いことから体調管理に気を使い、ここ1年ほどは週に2日の休肝日を作っています。また太りやすい体質なので食事制限をしたり筋トレ、スイミングなどの運動も心がけています。

そんな中、つい最近嬉しい出来事がありました。励んでいたダイエットに拍車をかけたことでみるみる成果が出て、今年の初めには65kg後半だった体重が数十年ぶりに62kgを切ることができました。当初は「64kgを切れたら……」という思いでしたが実際に目標を越えると次の目標、次の目標とどんどんストイックになり今に至っています。目下の目標は60kg台ですが、健康が第一ですので、無理をしすぎないように頑張りたいと思います。

わが家の太郎 43

お犬様

永野 雅子

今年の夏の暑さは尋常ではない。あまりの猛暑にエアコンなしでは過ごせなくなった。

ところがある日、そのエアコンが動かない。購入日を見ると平成10年7月とある。なんと20年。それじゃ修理も叶うまいと、電器店に直行。

店員さんお勧めの省エネタイプに決めて、

「直ぐ工事できますか？」と聞けば、

「あいにく順番待ちで10日程お待ちください」

「えーっ！この暑いのに！」

仕方なく、扇風機を回しながらひたすら10日後を待った。

やっとその日、エアコンの設置が済んで、工事中車庫に繋いであった太郎を庭に入れてリードを外した途端、今迄よろよろの足取りだった太郎が木戸に向かって走り出た。

工事の人が木戸を閉めていな

かったことに気がついたが後の祭り。

あわてて外に出て「太郎！」と呼ぶと、近くまで来ては逃げる。

この暑いのに今から追いかけるなど、こちらが倒れてしまうと思いつながら、泣きそうになって、とりあえずリードを取りに家に入ると、何と太郎が部屋にいるではないか。びっくり！

今迄、脱出して自分から家に帰ってきたことのない太郎がどうしてと思ったとき、わかったのはこの暑さ、コンクリートの地面が素足では立ってられない程に焼けている。多分太郎も「これはたまらん」と思ったのだろう。さつさと家に帰ってきたというわけ。

やれやれ一件落着。さすがに彼も疲れたのか、水を飲んでぐったりしている。そこで新しいエアコンを試運転がてらつけると、今迄我慢していただけに、なんと快適。

ところが暑さはますます激しくなつて、夜も冷房なしでは寝られない日が続いた。

日中、太郎は倉庫の下で寝ていたが、とても居られたものではない。舌を出してあえいでいる姿に、13歳の歳を考えると、これは命の問題だと、部屋に入れて冷房をつけることにした。

昼間は太郎だけのためにエアコン、フル稼働。

銀行に用があつて行ったとき、支店長さんをご挨拶に来て下さり、「太郎は元気ですか？」

「はい、冷房の中で寝ております」

「そうですか、お犬様ですね」

その通り、でも今月の電気代の請求が恐ろしい！

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役



ああ、涼しい。天国！！